

# おおやまと

大倭出版局・大倭紫陽花邑

平成17年  
5月号

毎月23日発行  
通巻417号

(題字 矢追日聖)

★発行日 平成17年5月23日  
★発行所 大倭出版局  
〒631-0042 奈良市大倭町1の12  
☎(0742)44-0015  
★印刷 大倭印刷株式会社  
★定価 1部 250円  
★年間購読料3,000円(送料共)  
★振替口座 01050-6-67002  
大倭出版局  
URL <http://www.ohyamato.jp>



「幻蒼」中国四川省九寨溝 奈良市 和田 保さん撮影(文・6頁)

## 月例職員朝礼での講話より(上) 心と心の交流ができる雰囲気 大倭病院総長として

法主 矢追日聖

今月と来月は、大倭病院の職員さんが残っていた録音テープからまとめました。それは平成四年の五月から翌年一月までのお話であることが分かりますが、講話が同じ月に二回あったのかなとか、中には欠けている月とかもあるようです。平明な言葉の中に、職員のことを育てる心配りが感じられます。

(一)

今月は連休で一日から五日までお休みだったらしいです。私自身は毎日ウロウロしているの、たいした影響はないんですけど、皆さんは連休明けて何かぼーっとしているだろうと思います(笑)。ニユースなどを見ていると、往きも帰りも渋滞するし、色んな事件が起こったり、それから山に登って遭難して亡くなったような若い子もおります。連休が無かったら命があったと思うけれども、我々の人生の中では突発的に何が起こってくるかは分かりません。

今は本当に暮らしやすい季節です。この間までソメイヨシノの桜がたくさん咲いて、飲めや唄えやというような時がありました。もうすっかり散ってしまいました。これはもう毎年繰り返しているの、当たり前というような気持ちでいますけれども、考えてみれば、春になったら花が咲く、五月になったら新芽が伸びてきて新緑の頃になる。草一本にしても、一つ一つみんな小さい幹の中に一年間の歩みをきっちりしまいでいる。

それを間違ひなくやっているんやなあと、いつも思うんですね。

私は小さいカメラを持っていきますが、カメラの裏に出る何年何月何日という数字が、プリントしてもらったら出て来るんですね。二月二十八日の次は三月一日とポツと数字が出るんです。私は明治の人間ですから頭が古いんです。これが理解できない。こんな小さいカメラに、どうして教え込んだのかと思うと、ものすごく不思議に思うんですね(笑)。だけど植物もみんな同じことなんですよ。人間が段々植物のそういうところに近づいて来たのかと思つてね。何とまあ世の中変わったもんやなあと思つていきます。三十日と三十一日の月があるけれども、それが間違ひなしに出てくる。私はどうしたつてそんなことが理解出来ないんですね。院長先生は科学者だからよくお分かりだと思います。もう私には、世の中そういう不思議なことばかりですわ(笑)。

皆さん方は、こうした一つの病院の中でそれぞれが、一つの目的に向かつて仕事をしています。植物は無言にして、きつちりと間違ひなしに一年間運営していますが、我々人間には言葉というものがあるんですね。お互いに融和をはかつて仲良く仕事をしていくには、言葉で自分の心を伝達していきます。

それでいつでも思うんですが、世の中には喧嘩したり、争い起こつたり、殴り合いっこしたり、随分いろんなことがあります。テレビのドラマなどを見ていたら、ほとんど喧嘩が中にあるんですね、殺し合いもあるし……。結局、それはみんな言葉の問題が大いと思うんです。何でもない言葉でも、使い方によってはカッカカッカと頭にきて、喧嘩をするようなことになってきます。逆にどんな難しい問題であつても、穏やかな気持ちで

話し合いをすれば結論は必ず出てくるはずなんです。特にここは病院として一つの目的のもとに、職域の違う人達が一緒に仕事をしているんですね。言葉というのとは一番大事だと思つてます。

昔から、話し上手よりも聞き上手という言葉があるように、自分で喋るよりも聞く方が難しいです。皆さんは患者さんをお世話しているような仕事ですから、相手の言葉をまず聞くということなんですよ。それから、言葉を聞いてもその言葉には目に見えない心があるんですよ。ところが言葉も表現の仕方の下手な人もいれば、上手な人もいます。自分の心を正直に相手に伝えるような言葉を使う人もいれば、半分しか言葉に出せない人もいます。だから皆さんも、発声された耳に聞こえる言葉だけを捉えるのではなしに、その裏に流れている相手の心の状態をよく汲み取つて欲しいなと思います。患者さんの場合には特にそうだと思います。ところが、お互いに気持ちが悪くものだから、すぐに言葉の食い違ひが出てくる。

私の場合にはちよつと難聴なので、しょつちゅうそういうことがあるんですよ。相手の言つていることが半分しか分からない場合があります。だから、こつちがそうだろうなと思つて返事すると、全然別の話だつたりするような失敗が私にも随分あるんですよ(笑)。それで何回か聞きなおしますから、まあ分かるんですが……。

私のところへ色々と相談に来られる方があるんですが、だいたい女の方が多いんですよ。そうしますと、心の中で思つてることが十あつても、六つか七つくらいしか言葉に出てないんですよ。あとの三とか四とかを、こつちで汲み取つてあげなければいけない。だから、特に皆さん方に言うんだけれども、患者さんが自分の思つていることが十あつても、口に出すのは六ぐらいだと思つて

です。あと残つている四というものは、この人は何を考へているのかなと、そんなことをあなたたち自身の心の中で汲み取つてあげて欲しい。それで、充分に聞き取つた上で回答する。

それは、お互いに皆さん職員同士の場合も、また先生達と看護婦さんの話しでも、相手の言わんとする所を十二分に聞き取つて、そしてこちらからそれに合ったように回答をしていく。そのような会話の仕方によつて、争ひの起こらない円滑で仲良く仕事ができる職場になると私は思います。

大倭のこの病院も日が浅いですけれども、職員の方々に、特に言葉、会話ということに注意していただきたい。職域において、上の人もおれれば下の人もおられますが、自分の立場というものをお互いによくわきまえて、言葉の使い方を仕事の中において研究してもらえるとありがたいと思います。お願いします。

## (一)

梅雨に入りまして何となくジメジメした日になつて参りました。皆さん方も家庭の中とか自分の健康とかに、特に留意して欲しいなと思います。

この間、厚生省から奈良県の監査に来られました。県の福祉関係の中で菅原園——身体障害者療護施設と言つても、心身障害者ですけれども——と大倭安宿苑の本部との監査だったんです。

私も形は一応理事長になつていますので、その場に列席させられました。講堂の中で、ちょうど正面に机を置いて、監査の方が四人座つていて、こちらには県庁の福祉関係の方が五人座つていて、我々はこつちに座つていて。そういう裁判所のような配置で皆座つていたんです。それで監査される時に気が付いたんですけれど、厚生省の人達は言葉遣いは悪くはない。けれども、何かし

ら高い所から下を向いて物を言うような態度があったように思いました。また我々社会福祉の仕事をしている職員さんから見れば、監査と言うと、高い所から怖い人が出て来たという恐怖心があるように思っただけですね。

とにかく社会福祉というのは、国の行政の中でも大きな柱になっているんですね。厚生省の方々はその一番上部にいて、末端の福祉の施設を預かっている我々は体を使って、国の一つの方針に向かって精進している立場なんです。上下の関係はあったとしても、仕事の上から見れば厚生省の役人さんのように書類ばかり見ている人と、汗をかいて仕事をしている人とどっちが尊いかと言うと、やっぱり現場において仕事をしている人が一番尊いんだと、私は思っているんです。

それでまあ監査をする方は、「はい、これ持って来なさい」「これ、裏付けは？」と。うちの事務関係の人は、その前に座って回答し、裏付けの書類と言われたら取って来てそれを出す。そういうような雰囲気です。二日間過ぎたんですね。

現場のことですから、厚生省の方々から見れば、やはり事務の中では手落ちがあるし、間違っているところもたくさんある。それは当然のことだけれども、違反は一つも無かったです。それで最後に感謝の言葉を述べた時、細かく監査をしてもらうということは非常に有り難いけれども、裁判所で何か犯罪をした者が取り調べを受けているような感じを受けましたというような挨拶をしたことが私はあるんです。それで監査官の一番偉い人が一応頭下げられましたけどね。まあいつもあの人は、全国を調べて行くような人ですから、前提として何か違反はないか、ややこしいことをやっていないか、公費を使って仕事をしているんだからという、やっぱりそういう気持ちで物を言わ

れたんだと思うんです。悪意は何にもないと思うけれども、受け取る我々の側から見ると、何か悪いことをして、取り調べを受けてるように私は思っただけですね。だから言葉と態度というものは非常に難しいといつも思うんです。

大倭の病院の中でも、職種では上の人もいれば下の人もいる、上下の関係になっています。けれども気持ちの中においては全部平等だと思っただけです。だから自分の部署で責任のある方は、そこで一緒に仕事をしている同僚に対しては、心はみんな分かっていると思いますが、やはり相手の人達が和やかに受け取るような言葉遣いをしてほしい。まあ私はこの現場をあまり知りませんけれども、やはり責任のある上の人は、命令調で物と言うと良くないと思うんです。「何しなさい、これしなさい」というような態度でおられると、受け取る側はびくびくして、「あつ、どこかに欠点あるのかな、どうか」という不安感を持つ。そうすると、人間対人間のお互いの信頼感というのが薄くなると思うんです。

厚生省の方は来られても、明るる日帰られますが、皆さん方の場合は毎日同じ顔を会わせて仕事をしている者同士なんです。そういう意味において、やはり責任のある方はその立場での物の言い方をしてほしい。現場で仕事をしている人達に対しても、態度とか言葉遣いとか親近感を持って、心と心を交流できるような日日の雰囲気を作って頂きたいと特別にお願いしたいと思うんです。

### (三)

今日もまた蒸し暑い日です。平戸ツツジはもう散りましたし、今はちょうど旧の五月、さつきの月ですからサツキが花盛りです。まあ、旧暦のその通りに、毎年同じように季節というのは狂いな

く回ってくる。人生も同じように巡ってきていると思うんですが、狂いなく自然が移り変わってくるのを見て、いつでも何かしら私は嬉しい気持ちがあるんです。四月になると新芽が出てくるし、六月の梅雨時になると、充分に水分を要求する時ですから、天から雨を降らしてくれるんです。

瑞光院の玄関の入口に、黒い塗りの郵便受けが吊つてあるんですけども、その上に黄色い細かい砂が溜まってくるんですね。いつも掃除をする時に、「ああこれは中国の大陸から空を渡って日本の領土へ落ちて来ているんやな」と、そんなことを思いながらその上を拭くんです。

日本の国は昔から瑞穂の国、つまり稲を食べて生きている民族なんです。ぼちぼちお宮さんでも、田植えのお祭りが始まっています。梅雨に雨が降らなければお米さんが育たないんです。天地自然というのは、この日本列島に住まいしている我々に対して恵みの雨を下さっている。私はいつでも梅雨が来た時に、「ああうるさいなあ」「鬱陶しいなあ」ということよりも、我々が主食として食べているお米が出来てくる、これは本当に天の恵みだと思っっています。梅雨の雨の中には稲や樹木がよく育つ栄養のようなものがあると思うんです。

ところが我々動物、生きて人間に対しては、良くないと思うんです。家の中にはすぐにカビが生えてくるし、それからまた梅雨の雨にはできるだけかからないように用心しないと病気になるんです。特に子供も梅雨時には冷やさないように、外の雨が直接身体に当たらないように、お互いに親は気をつけてもらったら有り難いと思うんです。

梅雨という季節が過ぎますと、今度はもうカンカン照ってきた太陽の暖かい熱によって、稲が段々と実っていく。まあ全てがそういうように発育していく。人間の肉体もそれと同じように発育し



ていくんですから、自然の流れ、自然の動き、そういう毎年繰り返してくる狂い無い自然の季節の移り変わりに対して、我々は心から感謝して暮らしたら有り難いなと思います。

#### (四)

おはようございます。本当に月日の経つのは早いもので、もうすっかり七月になって参りました。明日は皆さんご存知の七夕さんです。まあ七夕さんには大倭の福祉施設の方でも毎年の年中行事として皆が楽しみます

日本で七夕さんというのは、私もおぼろげに知らないけれども、中国の伝説からきていると思いません。天に輝いてるお星さんの古代での物語で、牽牛という男の人と、織女という機織りの女の人が天の川の両側にいて、一年間会うことはできないが、七月七日にお天気であれば会うことができる。そういうような若い人の恋愛という浪漫というのか、とにかく美しい物語が昔からあるんです。

お月さんやお星さんというのは、昔の人達は神さんとして尊敬し、崇拜したり拝んだりしたものです。織女という女のお星さんが織物や手で何か物事をする技術とか、そういうことが非常に良く出来る人らしい。それで頼めば、女の人であればお裁縫が上手になるとか、手先の仕事が器用になってくるとか、そういうようないろんな伝説があって、これが七夕さんの行事として昔からあるんです。

日本の七夕さんの場合は笹、竹を立てて、その枝に自分の願い事を書いた短冊をぶら下げて、そして人の幸せを祈るという行事になっています。例えば、病気の人が自分の身体どこが悪ければ、肺が悪いから、腸が悪いから、胃袋が悪いから七夕さん治して下さいというようなことを短冊に書

いて、笹の葉にぶら下げる。そして、その明るく日に川へ流すんです。

中国では笹文化はなかったと思いますが、日本では笹、竹は何か神さんと縁があつて、これを立てて置くと天の神さんが降りてきて、護つてくれるというような信仰があるんです。だから、お月さんもお星さんも天の神さんやから、我々が下から竹を立てると、そこに神さんが降りて来られるという。まあそれは七夕さんの時だけでなく、屋敷を新しく建てる時、その四隅に枝の付いている青い竹を立てる。そうすると、天の神さんがそれだけの範囲は綺麗にして護つてくれるというんです。

それと七夕盆という、これもお盆の一つの始めになるんです。七夕さんが来て、それからその次の七月十五日がお盆の日ですから、その準備が七月七日から始まって行くんです。田舎であれば七日の日にお墓参りするとか、あるいは井戸の水を換えて井戸の中を綺麗に掃除するとか、そういうようなお盆の行事を七夕の日から始めるんですよ。結論は皆幸せにいくように、また自分の願い事や思惑を叶えてもらうようにという、人生の中において一つのこれは精神的潤いですね。

まあ七夕さんに頼んでも、自分から努力しなかつたら何にもならないですけれども、昔の人はやつぱり天の神さんを拝むと自分の願い事を聞いてくれるという、そういう一つの信仰があつたんですよ。それで七夕さんを新暦になつても七月七日に――本当は旧暦ですけれども――皆で行事をしていきます。

それともう一つ、皆さん方にご注意申し上げたいことは、目の前に見えていますけれど工事が始まっています。これは有料の介護型老人ホームなんです。だから行政の施設ではありませんが、

「エスティームライフ学園前」という名の許に、ここで有料老人ホームが出来るんです。先月の十日の日に地鎮祭をやりました。まだ今のところこの程度ですが、段々と日が経ちますと、ちようどこの病院の北門のあたりから、下の西の齋庭さいぢやう、それから上の道路と三方から大きなダンブカーで、土を運んできて埋め立てしてくれそうです。だいたいダンブの運転手は、高い所に座っているからぐるりが見えないらしい。また土をいらつていている人は性格も荒っぽい人が多いんです。だから職員の皆さんの中でも、車で通勤されている方がたくさんおりますし、今現在のモータープールはこの下の方に変わりましたので、あそこまで車で坂を下るんです。そうするとダンブカーが下から来る、上からも来る、横からも入つて来る、色んなことがありますので、徐行し注意して交通事故の起こらないようにお願いします。

事故が起こるとお互いに、現場の方も不幸だし、怪我をしたあなた達自身も不幸なんです。特に気を付けて頂きたいなと思います。あと一年、来年の六月頃までだと思えます、その点だけは宜しくお願いしたいと思います。(続く)

#### しばれずみ

奈良市 福田 千子

暮らしを見渡せば、家事、子育て、法主さんのテープ起こしとやりかけで置いてある事ばかり。交流の家や田んぼの草刈りに行く私に、「よそ様の草刈りもいけど、家の庭はどうなん？ ま、母さんらしいけど」と娘。

それでも大倭にせつせと通うのは、先に行った父ちゃん(※故福田努さん)のお墓があるし、何よりも大ざっぱで、いいかげんそのままの私をふんわりと受け入れてくれる大倭の人達とのつながりが好き。感謝。



## 遠くまでやって来たのだった

ふくだささぶろう

ぼくと大倭の付き合いは長い。思えば不思議な縁のだが、学生時代、ワークキャンプのボランティア活動で訪れたのがきっかけだった。二十才だった。もう四十年以上が過ぎた。

あれは大学三年の夏だった。ワークキャンプより大倭のほうに興味が深くなり、当時大倭の事業の一つにブロック工場があつて、その工場で夏休みを丸ごと働くことになった。出来あがつたブロックを次々に工事現場までトラックで運ぶ。車からのつみおろしの助手がぼくの仕事だった。

毎朝五時に起床。終了はいつも深夜十二時を過ぎた。遅い食事をして、翌朝はまた五時起床。真夏の炎天下の作業だったが、不思議にからだはシンドクなかった。秋、学校が始まった。授業をほったらかして働いた。よほど思うところがあつたのだろう。それに仕事仲間との会話が面白かつたからだ。トラックを運転するのは教長さん（矢追家麻呂さん）と現在は大倭印刷社長である中島健さん。公私ともにずいぶんお世話になった。

四十年以上だからみんな若い。健さんはまだ二十三才。独身だ。ぼくとは年齢が近いのでウマが合った。二人とも女性にたいする関心が旺盛である。そんな年頃だ。往復の車中は女の話で沸騰した。率直に言えばワイ談である。人生の諸問題に触れるまじめな話もしたのだが、当然というべきか、必然的に女の話になれば、人生の諸問題より熱がこもった。

ワイ談には立派な効用があつたのだ。睡魔の防止である。なにしろ毎日が早朝五時の深夜十二時である。眠い。ある日、いつものように大阪にブ

ロックを運んで、夕日を背に大和川沿いの道を奈良へ戻るときだった。突然コツと音を立て、健さんがハンドルにオデコを落とし、信号待ちの交差点で眠りこけたのである。赤から青に変わるわずか五十秒、睡魔に襲われ深く眠ってしまったのだ。ぼくは健さんを眠らせないために、いつもより情熱的に女の話で盛り上げたのだった。

ここでは書きにくい面白いエピソードが山ほどあるのだが、いまは思い返すとなつかしい。

ときどき教長さんがお酒をおごってくれるのも楽しみだった。教長さんは自分は呑めないのか、呑まないのに、「サブちゃん、もつと呑めや。呑んだら体が元気になる（ぼくの耳にはカラダがカタラと聞こえた。カタラとしゃべるのは奈良の方言だったのだろうか）」とすすめる。そのたびに、ぼくは深く酔ってしまったのである。

肉休労働と酒と女の話——輝いてまぶしいほど、少し切なく楽しい黄金の青春。生駒山に落ちる夕日を眺めながら、ぼくは遠くまでやって来たのだと、なぜか思ったりした。

卒業のとき、教長さんから「大倭に来ないか」と誘われた。ちよつと考え、迷つたのだが、外で就職した。大倭に入つたら女の子にもてなくなるんじゃないか、というのが本音かもしれない。

就職先は未生流中山文甫会といういけばなの流派である。ゼミの教授、鶴見俊輔先生の紹介だった。「三日でやめると困るんだなあ」の先生の言葉に、三日間はがまんして出勤した。いけばなの流派は上下構造の封建制度、とてもじゃない、もたないだろうと思つていたが、三か月、三年、い

つまにか三十九年も勤めた。この職場では、人の縁の不思議さ、集団の中の「個」と「個」のぶつかり合い、妥協と主張から一つのものが生まれて具体的な形になる面白さを教えられた。いけばなの流派は圧倒的に女性ばかりの集団だ。それと年齢層が十代から九十才の高齢まで、ばらばらである。小さいこと一つ決めるにも簡単ではない。アレもコレもと寄せ鍋のようなごつた煮の日々が、ぼくの性に合つたのかもかもしれない。

で、話しは変わるのだが、ぼくは二十五年前から京都府と奈良県の県境、京田辺市の大住というところに住んでいる。なんでも大住の先住者は、九州大隅半島に住む隼人族の末裔だったという。彼等は七二一年に大伴旅人によって征伐される。戦に破れた隼人たちの一部がこの地に流れ住んで、現在の大住（おおすみ）という地名になつたそうだ。毎年十月十四日には、旧村の地元の子供たちによる隼人舞が、地区の外れにある月読神社で奉納される。千年の古式にのつた隼人族の戦の舞だそうだが、調べたら面白い由来があるのだろう。それと、祭られていた神様のツキヨミさんがまたいいのだ。白洲正子さんによれば、ツキヨミさんは何もしない神様とか。しかし存在しないと困る神様。存在自体が役に立つ。なんともぼくの趣味に合つた神様なのである。

神社の前は広い水田である。その一角を借りてぼくは五年前から農業をしているのだ。畑といっても六十坪程度のものであるから、農業とはおこがましいのだが、少し入れこんでいる。目下のところのぼくが一番の趣味。

近くに木津川が流れる。地形のせいか畑は夏に夕立が多い。本物のお百姓さんは、雲を見て雨の

気配にさつと引き上げる。残されたぼくは、雨が来ると陽射しよけに立てたパラソルに避難して、雨がやむのを待つ。周囲の稲が雨と風にゆれる。緑の波を眺めながら、ぼくは仕方がないので、パラソルの下でタバコを吸う。こうして雨宿りをしているとき、リス（イタチか？）が激しい雨音に驚いてトウモロコシ畑に逃げ込む。蛙がびよびよこ跳びはねる。小動物たちはぼくの気配にまつたく気付かない、やがて雨が上がるのだ。するとどこからか派手な衣装をまとった雄のキジが舞い降りる。美しい鳥だ。夢のような光景である。キジに気付かれないように、そとパラソルから顔を出し、ぼくはふうつくと背伸びして、ふりむくとツキヨミさんの森の向こうに、虹が立っていたりする。そんなとき、唐突にぼくは人間の孤独を実感する。そうして、ふつと未生流の流祖（二百年前の人）の書かれた伝書の言葉が浮かんだりする。

「寂寥としてよく万象の主となる」

流祖は、もとは武士の出身なので、ぼくのようなやわな人ではない。だから「寂寥」は正しくは「きびしくきびしく」と読むのであるが、そんなことにはこだわらず、おかまいなく、ぼくは字面通りに「さびしい」と読むのである。そうして、ぼくは畑に一人立って、遠いところまでやって来たんだなあ、と思う。しかし、どうなんだろうか。人間はどこにいても、（今）ここにいる場所が、一番遠いところまで来た場所なのだと、思ったりする。（京田辺市 福田三郎）

## \*表紙写真について\*

九葉溝は、チベット高原東端の標高3千メートルを越える山中にあって（1992年、世界遺産登録）、全長50キロの渓谷に、118もの大小様々な湖が数珠のように連なって、上の湖から下の湖へ透きとおった水が流れ下っているような、世にも珍しい光景の場所だそうです。その湖底を、和田保さんが撮影してこられたものです。（編集部）

## 「だま」

### 年少者の犯罪と「宗教」

大阪府茨木市 杉 浩 史

いきなりこんなことを言うとう驚かれるだろうが、最近ふと考えていることの一つに、「犯罪の低年齢化は、宗教の責任かも……」ということがある。

「風が吹いて桶屋が儲かる」式と思って嘲笑するなけれど……。

その昔私達が子供であった頃は勿論、ここ二三十年前の頃でも、子供達の戸外での遊びには、学校や近所にガキ大将というか、仕切り屋みたいな奴がいて、弱い子や小さい子にはそれなりのハンデイを与えて、うまく遊んでいたものだった。それにモノが少なくて家族がたくさんいれば、自ずとルールを作らなければ、毎日のように諍いがおきてしまう。それではやって行けないから、「分かち合う」ことを覚えたのだ。いわば不文律である。

また、「赤子の手を捻る」という言葉や、それを諭える言葉もあるが、本当に赤子の手を捻るようなことをする人間が出て来ることは勿論、想定されていなかった。ところが、実際に赤子の頭に包丁を突き立てるとい信じられない奴が出て来てしまうから厄介なのだ。

戦後、高度成長期を経て物質的に少し豊かになって、生活自体は念願の欧米並に近づいた。ここ

ろが、欧米と決定的に違うことの一つに、彼等は多かれ少なかれ「キリスト教倫理観」をある程度持っている。親達は当然のようにそれを子供に教え込む。では、日本ではどうだろう。日本における宗教の存在感は欧米のそれに比べ、はるかに見劣りするものでしかない。

世の中が豊かになって、多くの子供達が家庭でも個室を与えられ、孤の世界にどっぷりつきつて日がな一日、ゲーム機に熱中する。家庭でもTVゲームに夢中の方が、手がかからなくて済むから、食事の時だけの対話くらいで、コミュニケーションが取れていると錯覚をする。今や子供社会は崩壊し、ガキ大将を必要としない。人間対人間のルールを学ぶ場が奪われてしまっているのだ。かくしてゲームの中のバーチャルな世界と現実の世界との見極めの出来にくい子供が量産されてしまう。親は「うちの子に限って……!？」と絶句するのだ。

年少者の犯罪というのには、本人がそのことの意味を認識出来ないところに何ともやりきれないモノが残るのが常である。そこに持つてきて、欧米と違って日本では、全く……と言つてもいいくらい宗教が、その役割を果たしていない。

貧しい時代、特別な訓練がなくても、自然と身に付けていた倫理観。逆にそれが今、期待できなくなつたからこそ、何よりも「宗教の復権」を考えねばならない……と私は思うのだ。真実味を失つてしまつたような「葬式仏教」と「結婚式神道」……。山折哲雄さんの言う「日本人は『宗教』という錨（いかり）を荒波にもぎとられ、漂流しようとしている」という意見に、私はグーの音も出ないのである。マニアックな宗教論は誰方かにお任せするとして、私は宗教の持つベシックな部分にこだわってゆきたい。

# 寸 莎

第64回

横 山 一二子さん



なめたらあかんぜよ!

今回は、横山一二子さんに大倭との係わりについて聞いたのだが、明るくオープンに語ってくれた。

横山さんは、北緯四十五度、日本最北端に位置する宗谷岬の近く、北海道枝幸郡枝幸町に生まれた。育った家は山と海に囲まれた豊かな土地で、冬には流水群がみられる。

父親の駒治さんはがんこ者。人の世話好きで、どんな仕事でもやってのけた。お陰で食べる事に困ったという覚えはない。母親のヨシさんは黙って駒治さんについて来た人で、そんな母親をみているのもどかしかった。横山さんは七人兄妹の四女。「子供の頃は静かで物言わずだった」という。次女には大倭でおなじみの米山キミさんがおられる。

中学高校時代は、学校の教員となつたお兄さんと共に宿舍で暮らし家

事全般を任せられたり、父親が大病で入院した時には常に傍らについて介護をしていたという思い出がある。

十八歳で就職。森林組合の事務員となった。工作上、法務局に通う事が多く、そこで働いていた三つ年上の男性と結婚したのは二十二歳の時だった。長男一介君が誕生する。しかし、夫の女性問題によって二十六歳で離婚。それからは無我夢中の人生が始まった。夫側が子供を引き取りたいという話しになり、悩んだ横山さんは当時大阪にいた姉の米山さんを訪ねた。姉の夫の義理の叔母である工藤みさをさん宅が法主様の教導の会場になっていたご縁で、紫陽花邑の法主様をお訪ねした。澤口志なさんが旧拜殿に案内して下さいました。法主様は、「例えば、子供を手放し再婚して自分が幸せになればなるほどに子供を念うようになるだろう。どうせ念い続けて苦しい思いを

するならば子供をひきずって苦勞しなさい」「子供を連れて、行く所がないのが心配なら、ここに来たらええ」と言い、施設の方を指さして、「あそこに働く所もあるから」と言われたという。しかしその時は来る気にはならなかった。当時の紫陽花邑は、恐ろしく山の中で何も無い所だったからだ。

一旦北海道に帰ったところ、子供は夫側に連れて行かれ、その一族の行先が分からなくなっていた。横山さんは札幌の個人病院の事務をしつつ子供を探した。「なめたらあかんぜよ」、映画『鬼龍院花子の生涯』で夏目雅子が痰火を切るが、そんな心境であった。一年がかりで見つける事ができた。この時は、「子供と逃げるなら大倭へ行こう、津軽海峡を渡ろう」と思った。公園で遊んでいた一介君をさらってタクシーに飛び乗った。タクシーの中で一介君は不意に、「お母さんと暮らす」と言った。その頃大倭では、法主さんがまだ来るとも決まっていない横山さんを迎え入れる準備をしていたという。

昭和四十一年十一月、法主様がどんな人かも分からぬ大倭に着的の身着のまま飛び込み、長曽根寮の寮に入った。炬燵一つだけ買った。もう心も体もポロポロだった。

早速長曽根寮での介護の仕事が始

った。矢追美壽紀さん、志津女さん達と働いた。住み込みだったので二十四時間介護のようなものであったし、慣れぬ仕事に、関西弁が聴き取れず、とうとう倒れてしまった。しかし、一介君が大学を卒業し、就職するまでは歯をくいしばって働いた。子供がいなければ三月ともたなかつただろうという。

昭和五十九年、一介君は無事大学を卒業し就職が決まった。そして横山さんは長曽根寮を退職した。本当に羽根を休めたかったという。三ヶ月間は眠り続けた。その後は、大倭病院や八重垣園で勤め、現在は個人契約でホームヘルパーをしている。

「福祉の仕事で大切な事は、人受容Vだと思ふ、そうして信頼関係ができてきたら、そこから漸く対等な関係としてスタートできるのではないか。型通りにはいかない仕事で、一十一がゼロになったり十になったりする」と横山さんは言う。法主様は福祉の現場でも横山さんを型にはめずらせてくれたので、感覚を發揮してやってこれたようだ。

「私のような者でも受け入れてくれた大倭、法主様の傍だからこそ、子供を一人前に育てることができたことに深く感謝している」。現在はソーシャルダンスに夢中だ。Shall we dance? (聞き手：李章根)



# A W T C 日誌

4月15日 大倭神宮で箭負祭が行われました。矢追豊太郎さん(法主様の祖父)の、裏に「西矢追の開祖」と書いてある写真を見せてもらいました。

4月16日 弥栄踊りで毎年音頭をとってくれる音丸会さんから、会場を飾る提灯200張り

が寄贈されました。笠置カントリークラブでは有志が大倭会ゴルフコンペ。平成15年9月の第1回以来、4回目とのことでプレー後の懇親会も楽しかったそうです。

4月17日 第283回大倭会文化行事で、法主様の街頭宣布の地、阿倍野の陸橋へ。特に何も

ない場所ながら、参加者は36人と多数。記念撮影のあと大松寿

して昼食会、青山日元さんや、娘の反保良さん、中島健さんの話を聞き、草創以来の大倭の流れを噛みしめました



杉本順一さんの話「朝の拝殿で、阿倍野橋を訪ねる」ということは原点にもどるといふことである。原点にもどるとはどうい

## CGGGGGGGGGGGGGGGGGGGGG

### 第285回大倭会文化行事

## 国立国際美術館と大阪市立科学館

-「ゴッホ展」とオムニマックス映画-

- 日時：平成17年6月19日(日) 13時15分集合
- 場所：国立国際美術館(大阪中之島) 玄関
- 交通：近鉄学園前にて難波行き急行11:26発に乗り、難波11:56着、地下鉄四つ橋線西梅田行きに乗り約10分、肥後橋下車③番出口から西へ徒歩約10分

■ルート：希望者で二手に分かれ、国立国際美術館「ゴッホ展」か市立科学館で展示物を見学した後、合流して15時から科学館で映画「虫たちの不思議な世界-昆虫の神秘の世界-」(360度ドームスクリーン映像)を見る。

(注)昼食は済ませて集合のこと 雨天決行

■世話役：湯浅芳郎  
電話 0742-48-3389・(携帯 090-6987-5847)

【事前にお知らせした藤田美術館は休館期間ため変更します】

## E GGGGGGGGGGGGGGGGGGGGG

うことか考えよ」と法主様からお言葉をもらいました。この答えを考えながら、阿倍野橋に着くと、「モトヲ タダストイウコト」と。これは私にとって宿題をもらったことになりました。

その後、四天王寺に行った人達と昇ちゃんも一緒に、五重の塔に上って狭い室内で、目と鼻の先に外国人女性の胸の谷間を拝んだ由。

4月23日 大倭大本宮月次祭。ホームページ「谷底ライオン」

で杉山龍丸さんの事跡や資料を紹介している青年、久保康憲さん(彦根市)と坂上さん(奈良市千代ヶ丘、ホームページ「夢野久作をめぐる人々」主宰)が来邑。祭典後、教務本庁で有志十数人がお二人を囲んで龍丸さんの思い出等を語り合いました。

5月3~5日 F I W C は交流の家の整理と発掘をテーマにワークキャンプをしました。

5月6日 大倭神宮月次祭。夜、大倭会館で邑倭の会。

5月7日 西宮の内山俊孝、東京の太田れい子さんが来邑、杉本順一 青山法義さんと歓談。

5月8日 祝会。その後5時半から教務本庁で勉強会、『すさのお』98、99号を読みました。

大倭安宿苑では5月10日 晴天に恵まれ、長曾根寮あじさい広場で社会福祉法人大倭安宿苑成立49周年記念式

典を行いました。その後、各施設でもバイキング料理でお祝い気分が盛り上がりました。式典に先立ち、成謙坊大善神にお礼の参拝がありました(菅原園)

4月24日 家族交流会。全住苑者と家族が新館のホールに集まり和やかなひとときでした(須加宮寮)

4月24日 奈良県障害者スポーツ大会卓球競技会に4人が参加、2人が2位と3位に入賞。(長曾根寮)

4月15日 音楽クラブ、そして18日書道クラブ/21日誕生会/23日喫茶クラブ/28日美容教室、等をボランティアさんの絶大な協力を得て実施しました。(八重垣園)

4月27日 俳句クラブ。「春光や入社なる紺が映え」「奥津城は今工事中落ち椿」「卒寿来てまさかの佐保の花見かな」

# A T M i C

\* 月次祭(大倭神宮) 6月6日(月) 午後2時より大倭神宮にて。

\* 大倭会主催第四三九回祝会 6月12日(日) 午後2時より大倭大本宮拝殿にて。

禊(みそぎ)とは、自己本霊を覆っている枉罪を祓い加美のお徳を戴くこと。「つみそぎ」と「みいずそそぎ」という言葉が一体となってきた大和言葉。禊には、知恵の研鑽によって表面から枉罪を除く方法と本心、本霊の働きによって内側から除く方法とがある。

\* 月次祭(大倭神宮) 6月15日(水) 午後2時より大倭神宮にて。

\* 月次祭(大本宮) 6月23日(木) 午後2時より大倭大本宮拝殿にて。

**田んぼ通信**

## 田植えのご案内

今年も田植えの季節となりました。無農薬、EM農法で米づくりして8年目の春です。どうぞふるってご参加下さい。

**1月〇日(日)** (雨天決行) 午前9:00~

※泥で汚れてもいい服装で。(着替え、タオルは各自で準備) 軍手・軍足は用意します。

※昼食・飲み物は用意します。(持込み歓迎)

連絡先 TEL +2/-/-/./1,〇 (玄徳院)

先月号、高橋良美・見田暎子さんの文中、「初めて法主さんにお会いして依頼」は、以来の変換ミスでしたが編集部全員が見逃し。4月23日発行当日、月次祭で指摘を頂きました。すみません。

(編集部一同)